

Setsuwa – japanska texter

Pagen som åt upp sirapen

ある山寺坊主、慳貪なりけるが、飴を治してただ一人食ひけり。よくしたためて、棚に置き置きしけるを、一人ありける小児に食はせずして、「これは人の食ひつれば死ぬるものぞ」と言ひけるを、この児、「あはれ、食はばや」と思ひけるに、坊主他行の隙に、棚より取り下ろしけるほどに、うちこぼして、小袖にも髪にもつけたりけり。日ごろ、欲しと思ひければ、二三坏よくよく食ひて、坊主が秘蔵の水瓶を、雨だりの石にうちあててうち破りておきつ。

坊主帰りたりければ、この児さめほろと泣く。「何事に泣くぞ」と問へば、「大事の御水瓶を、あやまちにうち破りて候ふ時に、いかなる御勘当かあらむずらむと口惜しく覚えて、命生きてもよしなしと思ひて、人の食へば死ぬと仰せられ候ふ物を、一坏食へども死なず、二三坏まで食べて候へども大方死なず。はては小袖につけ、髪につけて侍れどもいまだに死に候はず」とぞ言ひける。

飴は食はれて、水瓶は破られぬ。慳貪の坊主、得る所なし。児の智恵ゆゆしくこそ。学問の器量も無下にはあらじかし。

『沙石集』第八卷十一節より

När Chuang zi flydde från djuren

今昔、震旦に莊子と云ふ人有けり。心賢くして、悟り広し。

此の人、道を行く間、沢の中に一の鷺有て、者を伺て立てり。莊子、此れを見て、窃に、「鷺を打む」と思て、杖を取て、近く寄るに、鷺逃げず。莊子、此れを怪むで、弥よ近く寄て見れば、鷺の、一の蝦を食むとして立てる也けり。然れば、「人の打むと為るを知らざる也」と知ぬ。亦、其の鷺の、食むと為る蝦を見れば、逃げずして有り。此れ、亦、一の小虫を食むとして、鷺の伺ふを知らず。

其の時に、莊子、杖を棄てて、心の内に思はく、「鷺・蝦、皆、我れを害せむと為る事を知らずして、各、他を害せむ事をのみ思ふ。我れ、亦、鷺を打むと為るに、増さる者有て、我れを害せむと為るを知らじ。然れば、如かじ。我れ、逃なむ」と思て、走り去ぬ。此れ、賢き事也。人、此の如き思ふべし。

亦、莊子、妻と共に水の上を見るに、水の上に大きなる一の魚浮び遊ぶ。妻、此れを見て云く、「此の魚、定めて心に喜ぶ事有るべし。極て遊ぶ」と。莊子、此れを聞て云く、「汝は、何で、魚の心をば知れるぞ」と。妻、答て云く、「汝は、何で、我が魚の心を知り知らずをば知れるぞ」と。其の時に、莊子の云く、「魚に非ざれば、魚の心を知らず。我れに非ざれば、我が心を知らず」と。此れ、賢き事也。実に、親しと云へども、人、他の心を知る事無し。

然れば、莊子は妻も心賢く、悟り深かりけりとなむ、語り伝へたとや。

『今昔物語』 卷十第十三話

Hou Ku hindrar sin fader från att vanära sin fader

今昔、震旦の□□代に、厚谷と云ふ人有けり。楚の人也。

其の父、不孝にして、父の遅く死ぬる事を常に厭ふ。而る間、厚谷が父、一の輿(こし)を造て、老たる父を乗せて、此の厚谷と共に此れを荷て、深き山の中に将て行て、父を棄置て、家に返ぬ。

其の時に、厚谷、此の祖父を乗せたりつる輿を、家に持返たり。父、此れを見て、厚谷に云く、「汝、何の故に、其の輿をば持返るぞ」と。厚谷、答て云く、「『人の子は、老たる父をば輿に乗せて、山に棄つる者也けり』と知ぬ。然れば、我が父をも、老なむ時に、此の輿に乗せて、山に棄てむ。亦、更らに輿を造らむよりは」と。

父、此れを聞て、「然らば、我れも老なむ時、必ず棄てられなむず」と思て、怖れ迷て、即ち山に行て、父を迎て、将返にけり。其の後は、厚谷が父、老父に孝養する事愚かならず。

此れ、偏に厚谷が謀に依て也。然れば、世挙て、厚谷を誉め、感ずる事限無し。「祖父の命を助け、父に孝養を至らしむる、此れを賢き人と云ふべし」となむ、語り伝へたるとや。

『今昔物語』 卷九第四十五話

(□□ anger att två tecken saknas i manuskriptet som använts för utgåvan. Ofta är det fråga om namn på regentperioder. I min översättning har jag valt att helt ta bort dessa passager.)

Ett lysande domslut

唐土にいやしき夫婦あり。餅を売りにて世を渡りけり。夫の、道のほとりにして餅を売りけるに、人の袋を落としたりけるを見ければ、銀の軟挺六つありけり。家に持ちて帰りぬ。妻、心素直に欲なき者にて、「我らは商うて過ぐれば、ことも欠けず。この主いかばかり嘆き求むらん。いとほしきことなり。主を尋ねて返したまへ。」と言ひければ、「まことに。」とて、あまねく触れけるに、主といふ者出でて来て、これを得てあまりにうれしくて、「三つをば奉らん。」と言ひて、すでに分かつべかりけるとき、思ひ返して、煩ひを出ださんがために、「七つこそありしに、六つあるこそ不思議なれ。一つは隠されたるにや。」と言ふ。「さることなし。もとより六つこそありしか。」と論ずるほどに、果ては国守のもとにして、これをことわらしむ。

国守、眼さかしくして、この主は不実の者なり、この男は正直の者と見ながら、不審なりければ、かの妻を召して、別の所にて、ことの子細を尋ぬるに、夫が状に少しもたがはず。この妻はきはめたる正直の者と見て、かの主不実のこと確かなりければ、国守の判にいはいはく、「このこと確か証拠なければ、判じがたし。ただし、ともに正直の者と見えたり。夫妻また言葉変はらず、主の言葉も正直に聞こゆれば、七つあらん軟挺を尋ねて取るべし。これは六つあれば、別の人のにこそ。」とて、六つながら夫妻に給はりけり。宋朝の人、いみじき成敗とぞ、あまねくほめののしりける。

『沙石集』第九卷三節より

Den gamle bambuhuggaren som tog hand om en flicka

今昔、□□天皇の御代に、一人の翁有けり。竹を取て籠(こ)を造て、要する人に与へて、其の功を取て、世を渡けるに、翁、籠を造らむが為に、篁に行き竹を切けるに、篁の中に一の光り有り。其の竹の節の中に、三寸許なる人有り。

翁、此れを見て思はく、我れ年来竹取つるに、今此る物を見付たる事を喜て、片手には其の小さき人を取り、今片手に竹を荷て、家に返て、妻の嫗に、「篁の中にして此る女兒をこそ見付たれ」と云ければ、嫗も喜て、初は籠に入れて養けるに、三月許養けるに、例の人に成ぬ。

其の児、長大するままに、世に並び無く端正にして、此の世の人とも思えざりければ、翁・嫗、弥よ此れを悲び愛して傳ける間に、此の事、世に聞え高く成てけり。

而る間、翁、亦竹を取らむが為に篁に行ぬ。竹を取るに、其の度は竹の中に金を見付たり。翁、此れを取て家に返ぬ。然れば、翁、忽に豊に成ぬ。居所に宮殿・楼閣を造て、其れに住み、種々の財庫倉に充ち満てり。眷属、衆多(あまた)に成ぬ。亦、此の児を儲てより後は、事に触れて思ふ様也。然れば、弥よ愛し傳く事限無し。

而る間、其の時の諸の上達部・殿上人、消息を遣て仮借(けさう)しけるに、女、更に聞かざりければ、皆心を尽して云せけるに、女、初には、「空に鳴る雷を捕へて将来れ。其の時には会はむ」と云けり。次には、「優曇華と云ふ花有けり。其れを取て持来れ。然らむ時に会はむ」と云けり。後には、「打たぬに鳴る鼓と云ふ物有り。其れを取て得させたらむ折に、自ら聞えむ」など云て会はざりければ、仮借する人々、女の形の世に似ず微妙かりけるに耽て、只此く云ふに随て、堪難き事なれども、旧く物知たる人に此等を求むべき事を問ひ聞て、或は家を出て海辺に行き、或は世を棄て山の中に入り、此様にして求ける程に、或は命を亡し、或は返来ぬ輩も有けり。

而る間、天皇、此の女の有様を聞き食して、「此の女、世に並無く微妙しと聞く。我れ行て見て、実に端正の姿ならば、速に後にせむ」と思して、忽に大臣百官を引將て、彼の翁の家に行幸有けり。

既に御まし着たるに、家の有様微妙なる事、王の宮に異らず。女を召出るに、即ち参れり。天皇、此れを見給に、実に世に譬ふべき者無く微妙かりければ、「此れ

は『我が後に成らむ』とて人には近付かざりけるなめり」と喜く思し食て、「やがて具して宮に返て、後に立てむ」と宣ふに、女の申さく、「我れ、后と成らむに、限無き喜び也と云へども、実には己れ人には非ぬ身にて候ふ也」と。天皇の宣く、「汝、然れば何者ぞ。鬼か神か」と。女の云く、「己れ、鬼にも非ず、神にも非ず。但し、己をば、只今空より人来て迎ふべき也。天皇、速に返らせ給ひね」と。

天皇、此れを聞給て、「此は何に云ふ事にか有らむ。只今空より人来て迎ふべきに非ず。此れは、只『我が云ふ事を辞びむ』とて云なめり」と思給ける程に、暫許有りて、空より多の人来て、輿を持来て、此の女を乗せて空に昇にけり。其の迎に來れる人の姿、此の世の人にも似ざりけり。

其の時に、天皇、「実に此の女は只人には無き者にこそ有けれ」と思して、宮に返り給にけり。其の後は、天皇、彼の女を見給けるに、実に世に似ず形ち・有様微妙かりければ、常に思し出て破(わり)無く思しけれども、更に甲斐無くて止にけり。其の女、遂に何者と知る事無し。翁の子に成る事も、何なる事にか有けむ。惣べて心得ぬ事也となむ、世の人思ける。此る希有の事なれば、此く語り伝へたとや。

『今昔物語』卷三十一三十三話